館林市のキュウリ優秀生産者は基本に忠実がモットー

群馬県館林市はハウスキュウリの大産地であり、全体の技術レベルが高いことでも有名だ。そうしたなかで野辺町の恩田昭一さんは昨年の春キュウリ、抑制キュウリ両部門で最優秀賞に輝き、館林市産業祭（JA館林市、館林商工会議所主催）において特別表彰を受けた。キュウリ作りを始めて七年しかたっていないというのだから賞讃に値する。「私ひとりだけの力ではありません。陰に陽に指導していただいているみなさんのおかげですし、それに自分の能力を越える力を引き出してくれる良い資材とめぐり合うことができたからです」と、淡々と語る。これを〝謙譲の美徳〟というのであろうが、三十二歳にしては人間も良くできている。「技術ですか？　別に特別なものはないんですよ。あくまでも基本に忠実ということしかありません」。「基本に忠実」はとても良いひびきを持った言葉であるが、それでいて新しいものにもチャレンジする勇気を持っている現代青年である。

群馬県館林市野辺町1.000
恩田昭一さん

恩田さんが初めて取り入れた「夏のかほり」

九年産共進会で二冠

トーホク交配「夏のかほり」に着目

恩田さんのハウスが建っている所は三野谷という地名。ナスとかキュウリでは歴史のある産地だ。お父さんは米・麦の複合経営として露地ナスを作っていたが、昭一さんの代からキュウリを取り入れた。いま入っている促成型が八年目に当るというからキャリアは浅い。それなのに昨年の共進会では並居るベテランを尻目に堂々最優秀賞をかち取った。しかも促成と抑制の二つの作型ともだからりっぱだ。

抑制は八月上旬まき、旧盆明けの中旬に定植、大体年内いっぱいの収穫である。苗は自分で仕立てた。そしてことしの促成に引き継いだわけだが、新しい品種を導入した。恩田さんの良き相談相手である栗原資材センターの社長、栗原正さんはこう語る。

「去年の抑制栽培でしたが、新しい品種を取り入れている人をグループで見学させてもらいました。その時の恩田さんのニコニコ顔がいまでも忘れられないくらい、いままで見たこともないようなすばらしいキュウリでした。きっと来年の促成で作るぞと思っていたら、はたせるかなそのとおりになったんです」

平成九年の館林市共進会において、春キュウリと抑制キュウリ両部門で最優秀賞に輝いた恩田昭一さん。速効性ミネラル「鮮緑」を使った今年産の春キュウリも快調だ。

この新品種というのは㈱トーホク（本社・栃木県宇都宮市駅前通三―五―一）育成の「夏のかほり」である。八月から三月にかけて播種するハウス越冬栽培、促成・半促成栽培、ハウス雨よけ栽培向き品種だ。

葉が小さく、側枝は中側枝で各節から発生、孫枝は果実の肥大につれてほど良く発生する。葉がつねに上向きで受光態勢が良く、生育後半になっても過繁茂にならない。果実の肥大力が強いためか悪天候下でも果形のみだれが少ない。果長二十一～二十二㌢の濃緑果で光沢が良く、収穫末期や高温期でも色あせしないし、収穫した後も色落ちやツヤボケせず、店持ちが良いといった特長がある。恩田さんがひかれたのもそうした点だったというが、さらにつけ加えるならば、風味が非常に良く、夏キュウリのような食味を持つこと、と、ベト病、褐斑病、ウドンコ病等に強いことなどの特長があり、これについてはいま進行中の促成ではっきり評価できるそうだ。この品種を取り入れた理由を恩田さんはこう語る。

「これからは味の時代だと言われます。夏のかほりは食味が良いらしいから試験的に作ってみようかということで。差別販売できたらよいがと思いました。簡易出荷ということで、くず抜きの百本詰め、平箱の大きいので出荷しています」

ご両親が健康を害したため労力が伴わず、苗作りは農協を通して委託した。十二月上旬播種、九㌢鉢に鉢上げした苗が到着したのが年明けの一月十一日。苗は斉一でなく、本葉二枚から三枚半くらいまでマチマチだった。それでも定植後はきっちり揃った生育をしたという。

なお、台木は同じトーホクのブルームレス台木「鉄人」というのを初めて採用した。

速効性ミネラル「鮮緑」の効能実証

株間を五十五㌢と広く取っている。大体四本から五本弱の栽植本数。ベッド中央部に植え付け、潅水チューブを一本通している。土壌は沖積土。耕土はかならずしも深くないがやわらかい。普通のトラクターで十五㌢から最大二十㌢ぐらい耕起。堆肥はあらぬかを養豚家に持って行き、豚にふませたのを堆積してもらい、完熟状態になったのを引き取っている。十㌃当り投入量二㌧ていど。

肥料については栗原さんの指導にしたがって施用している。放線有機がメインで十㌃五十袋、サングアノ十袋、ミネラル富士十袋、アルギット五袋、RBライトのほかにG―セブン（苦土肥料）五袋が入っている。以上の成分は窒素四十九㌔、燐酸九十五㌔、加里二十八㌔で燐酸が多い感じだ。

「三野谷という所は燐酸を多めにくれたほうがいいという土地柄なもんですから」と栗原さんが助言してくれる。追肥は液肥だが、ことしからミネヒロン㈱（茨城県東茨城郡内原町一四〇〇―六）の速効性ミネラル「鮮緑（せんりょく）」を使用している。これがことしとくに大きく変わったところだ。

成分はいずれも水溶性でマグネシウム一五％、マンガン七％、ホウ素一・〇％、鉄〇・五％、銅〇・〇四％、モリブデン〇・〇四％、亜鉛〇・〇八％。完全水溶性だから使いやすいし、微量要素効果が高い。

特長は定植後の根張りが旺盛で、木の徒長をおさえる。葉に厚みと光沢が増し充実する。下葉の枯れあがりや葉先の枯れ込みを防ぐ。恩田さんが「鮮緑」の効果としてとくに強調しているのは葉の枯れ込みが少ないことだ。

「鮮緑」顕著な微量要素効果

下葉の枯れあがりを防ぐ

「実は私の管理ミスで葉を少し焼いてしまったんです。遮光しなくてはいけなかったのにいきなり日が照ってきた、一時間ぐらいでしたけど照りが強烈だったんですね、それで葉を焼いちゃった。その後すぐに芽がふいてきましてね、その芽は実にいきいきとしたものでした。これは鮮緑の効果だったと受け止めていますし、また、その後の下葉の枯れ上がりも少ないようです」

潅水チューブで七日から十日にいっぺん流し込みをしている。一回の使用量は十㌃換算で二・五㌔ぐらいとのこと。昨年までは「鮮緑」の姉妹品「グリーンエキス」というのを使っていた。苦土一三％、マンガン八％、ホウ素二％の完全水溶性ミネラルで、葉先がピンと立ち、光合成を盛んにするため葉の厚みや光沢を増し、木の若さを保つなど効果がある(別項参照)が、「鮮緑」はそれに勝るとも劣らぬ効果を発揮すると恩田さんはみている。

下からミネラルを吸わせる一方、上のほうは葉面散布という〝両面作戦〟だ。葉色のおどろえは明らかに少ないと言っている。農薬と混用で、八百倍で散布している。「農薬と混ぜる場合は薄いほうがいいということなもので八百倍にしているんです。やはりこのくらいがいいようです」

ミネヒロンの前田幸宏さんのコメントによると、恩田さんのように下からもくれている場合は八百倍くらいがよく、下からくれない条件だったら五百倍くらいでよいそうだ。

葉の充実ぶりが感じられる。そのせいかベト病とかウドンコ病などの発生は見られない。「鮮緑」の効果として恩田さんは根に衝撃を与えないことと、吸肥力が良くなることを強調している。これは微量要素効果であって、バランスの取れた樹勢、実のなりの良さ等につながっているようだ。

二月十三日から収穫になっている。ことしは天候が不順だったため作りにくい年だった。夏のかほりという品種はかならず枝の出るタイプだということで、いつもの年より株間を広く取ったそうだ。「初期収穫量が落ちるかと思いましたが、連続着果させても草勢自体は落ちませんでした」

温水潅水で悪天候克服

六月いっぱいは収穫する予定でいるけど、一生懸命取るのは五月いっぱい。麦刈り、田植えが重なるからこれは致し方ないことだという。

管理面で特筆されることは彼岸ごろまでは温水潅水を行っていること。これも栗原さんの指導によるもので、四年前から実施している。ことしは雪が多かったぶんとくに効果があったように思うといっている。「地下水を使用しているんですが、雪水をくれるのとはだいぶ違います」。地温は大体二十一度くらい保持。

「私の技術と聞かれても取りたてて話すことはないです。あえて言えば、基本に忠実であれという考えでやっていることでしょうか。なにしろ人間のやる仕事ですから、まめにめんどうをみるかみないかだけではないでしょうか」と語る。

栗原さんがこうコメントしてくれた。

「基本管理に徹しているのはすばらしいことです。温度にしても潅水にしてもそうで、それが非常に良い結果になってあらわれているといってよいでしょう。炭酸ガス発生機も積極的に使っておられ、それがことしのような悪天候では生かされたようです」

グリーンエキス

完全水溶性で使いやすい

葉先が立ち光合成盛んに

完全水溶性の速効性ミネラル肥料。成分はマグネシウム一三％、マンガン八％、ホウ素二％。土壌潅注か葉面散布に使用する。

特長

(1)完全水溶性で使いやすく、微量要素の効果が大きい。
(2)根張りが旺盛になる。
(3)葉先が直立し、徒長をおさえ、葉の厚みと光沢を増し、光合成が盛んになる。
(4)下葉の枯れ上がり、葉先の枯れ込み等を防ぐ。
(5)花の揃いが良くなり、花色が鮮やかになる。受精を高める。
(6)果実のなり疲れをおさえ、長期間収穫できる。
(7)果実の品質が良くなり重量感を増す。糖度・食味が向上する。

使用方法

液肥として使用する場合は一回の使用量が五～一〇㌕、二〇〇～五〇〇倍液にする（五〇〇㍑のタンクに二・五㌕使用すると二〇〇倍液になる）。一カ月の使用量は一〇㌃当り二〇㌕の追肥する。注意点は液肥の原液は混入しないこと。

葉面散布として使用する場合は果菜類なら収穫前まで五〇〇～八〇〇倍、収穫始めからだと三〇〇～五〇〇倍（一五～二〇日間隔）。そのほか根菜類五〇〇～八〇〇倍・二～三回、葉菜類三〇〇～八〇〇倍・二～三回、花き五〇〇～一〇〇〇倍・二～三回、果樹三〇〇～五〇〇倍・三～五回。

注意点は生育初期はうすめに散布。農薬と混合散布の場合は一～二割うすめに散布のこと。一袋五㌕入り四袋、ダンボール詰め。

製造・発売元　ミネヒロン㈱（茨城県東茨城郡内原町一四〇〇―六、☎〇二九―二五九―五五一五、FAX〇二九―二五九―五五一七）